
W学園は、楽しいところっ！

天井 來歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W学園は、楽しいところっ！

【Nコード】

N4958T

【作者名】

天井 來歌

【あらすじ】

ヘタリアの世界で言う？人間？の高校生であるボク、志井菜陽歌（ ）は、世界の何処かにあると言われる『W学園』にやって来ていた。でもどうやって入ったかなんて、正直全然覚えてないのであります！
そして、潜入したボクを待ち受けていたのは、
“ムキムキマッチョな鬼”こと、ルートヴィツヒ（通称ルート）！
！出会いがしらアイアンクローをかましてきやがった！（その後、事あるごとに陽歌はルートにアイアンクローをされることになった）
まあ、それから色々あって、今までの生活を捨て（？）、『W学園』

の生徒として生活を始める事に。お兄ちゃん、ごめん。死ぬまで帰れないかも
とか思ってたら、お兄ちゃんまでやって来た!!「お前が楽しそうにしているから、俺も来た」だなんて!!しかもちよつと前までお兄ちゃんは……

。 。 ;) ! ?

馬鹿で亀更新の作者がお送りする、学ヘタの小説を、どうか生暖かい目で見てください! (ヘタリアのキャラは皆人名です。

「わかんねえよ、ばかあ!」な方は、多分読んで、解ってくると思いますので、試しに読んでみて下さい。あと、作者は馬鹿なため、話し方が分からないキャラはテキストに書きます、多分。(

第一話 W学園に潜入なんだぜ！（前書き）

新連載、好きだねー、自分。

ではちょっととした注意事項ー！

ヘタリアのキャラはみんな人名です。

恋愛に発展する事はまずありません。

亀更新です。

作者の都合で、主人公がちょっとした腐女子です。

……ぐらいですかね〜。

何かしら思いついたら、次回の前書きに書きます〜。

第一話 W学園に潜入なんだぜ！

「よし、無事に入れたぜ 何処から探索しようかな」
どもつ。 志井菜 陽歌と申す者ですつ！ ボクは今、世界の何処かにあると言われる『W学園』（の窓側の廊下）に来ているんです！ と言っより、潜入してるんだZE ちなみに歳は、17歳であります！ 性別は（メス）だから、誤解はしないでね 誰かにバレないかって？ ダイジョブ、ダイジョブ！ 制服（男子用）は、ちゃんと着てるし（要するに変装）、見つかったら見つかったで、逃げれば良いんだし 「考えが浅いなあww」と思っただ方、挙手！ いや、別に怒りませんよ。お兄ちゃんにも同じ事言われただけです！

「そんな事は訊いてないから、何でそこに居るのか説明しろ」
ですよね。 やっぱり何でボクが何のために………って、あれ？ 今ボクの思ってた言葉が、誰かによって言われたぞ？ 誰だ………？ ってぎよむ………！！！！？！！ 何なんだ、このムキムキマッチョは………！

第一学徒発見だよ！ ってか、このムキムキは尋常じゃないぞ。 ってか何か見たことあるな、このムキムキ。 誰だっけ。 ヘタリアフアンなら忘れてはならない人物………！ 金髪のオールバックで、スカイブルーの瞳………！ 誰だっけ？

「お前、さつきから五月蠅いぞ」
少々お怒りのムキムキマツッ
「誰がムキムキマッチョだ!？」

ぎゃー………！！

「も、ももももしかして、最初から全部聞こえてた感じデスカ？」
！

「そつだ。それ以外何があると言っんだ？」

（数分後）

「すまなかった。ついつい力が入り過ぎた……」

ようやく落ち着き、そう言って謝るムキムキ。

いや、『力が入り過ぎた』どころじゃないんですケド？

「そう言えば、自己紹介がまだだったな。俺はルーセ「ルwertオオオ〜！！」来やがったか……」

誰かが、凄い勢いで叫んで、走ってくる音がムキムキの自己紹介を遮った。一方、ムキムキは呆れた表情でいた。

「？」

ボクは、声が出した方を見た。茶髪に、（ボクから見て）右側にアホ毛（凄くくるんとしている）があり、凄くヘタレそうな人物がこちらに駆けて来た。

ボクは、その姿に見覚えがあった。

第一話 W学園に潜入なんだぜ！（後書き）

ではでは、また次回

第二話 枢軸三人揃ったいやっほい！！（前書き）

今回はちと長いかな？

いや、そんなに変わんないね。

いや、短いね。

では、

あてんしょん

- ・ヘタリアキャラはみんな人名です。
- ・恋愛に発展する事はありません。
- ・ムキムキがアイアンクローをかましてきます。
- ・感想、下さい。（え）
- ・gdgdです。覚悟して読んでください。
- ・主人公は、にったまが大好きです。そして、ドイツの名前をよく忘れます。（なので、ムキムキと呼んでいます。）

まあ、このくらいで。

本文どうぞ

第二話 枢軸三人揃ったいやっほい！！

あれはまさか……。

「またか！ フェリシアーノ！！」

ムキムキが罵声をあげる。

「やっぱり！ イタちゃんじゃないか！ って何でフェリシアーノ？
「だってえ〜。軍用の運動靴の靴紐ほどけちゃったから、ルート
に結んでもらおうと思ったのに、ルート一人でどっか行くんだもん。
捜すの大変だったんだよ〜。菊にも手伝ってもらってー……………お？
わあ〜、君可愛いね〜！ 今度一緒に Pasta 食べない？ 美味
しい Pasta ご馳走してあげるよ〜」

ムキムキと話していたのにも関わらず、ムキムキの事は無視し、
ボクをナンパ（？）してきた。

いつもと同じ調子だな〜とか思いつつ、「うん、良いよ〜」とお
誘いに乗ってみたりしていると、ムキムキが、

「いい加減にしろ、フェリシアーノ！ そこに正座しろ！」

と、命令した。

「あう……………。ルート……………」

〜ムキムキ、イタちゃんにお説教中〜

ムキムキが誰だったか未だに思い出せないまま、イタちゃんが説教されているのを見ると、

「フェリシアーノくん、ルートさん、そこにいらっしやいましたか！ 随分捜しましたよ！」

と、さつき、イタちゃんが走って来た方向から、別の誰かが駆けて来た。

おう？ イタちゃんより背が低くて（ボクより高い）、黒い髪、何だかちよつと控え目オーラを醸し出している人物がこちらに走って来るではないか。

…… あれは！ いや、あのお方は！

「はあ、はあ、はあ……。やはり老体には少しきついですね」

にったまじゃないかあああああ！！

「おや？ ルートさん、この方は……？」

にったまに訊かれ、ムキムキは、イタちゃんのお説教を中断して、にったまにボクの事を説明した。

「ああ、菊。来たか。どうやらコイツ、この学園に侵入してきたらしい」

侵入とは人聞きの悪い。

ってか、ん？ にったまが菊？ なして？ なして植物？

「ええ！？ この学園にですか！？ ？国？でもない限り、この学園には入れない筈ですよ！？ どうやって入られたのですか！」

にったまが質問してきた。ボク……志井菜 陽歌はにったまの声が聞けて嬉しいのであります……（＝ワ＝）

「頑張ったら入れたのであります！ 正直、ボク自身、どうやって入ったかなんて全然覚えてないんであります！」

と、幸せ気分で敬礼しながら言うと、ムキムキが、

「何だと！ 覚えてないだと！？」

と、びっくり仰天という感じで言ってきた。

「ヴェー。珍しい事もあるんだね」

「フェリシアーノくん、経緯を知らずにそんな事は言えませんよ…

…」

にっ たまがイタちゃんに突っ込む。

「ところで、貴女のお名前は？」

と、にっ たまにお名前を訊かれたので、答えたんであります！

「あ、ボク、志井菜 陽歌と言つ者です！」

第二話 枢軸三人揃ったいやっほい！！（後書き）

今回は、主人公プロフィールと、枢軸三人プロフィールです。多分。

（え）

さっくり書く予定ですー。

今更プロフィールだよっ！ その1（前書き）

今回は、前回お知らせした通り、主人公と、枢軸三人のプロフィールです。

あてんしょん

・特にないです。

今更プロフィールだよっ！ その1

主人公

名前：志井菜陽しいな はるか

誕生日：4月28日

年齢：17歳

身長：162？

容姿：スタイルは、上の下。髪（焦げ茶色）は、二の腕ぐらいまでの長さで、いつもポニーテールしている。ポニーテールした時の長さは、うなじぐらい。瞳は、黒。

その他：ヘタリア大好き高校生！！ 中でも、日本とイギリスがお好き。ちょっと腐女子。後々、菊と仲良くなる。

フェリシアーノの事はフェリちゃんと呼び、ルートの事はルート（時々ムキムキ）、菊の事は菊と、呼ぶ。

枢軸

名前：フェリシアーノ・ヴァルガス

誕生日：3月17日

年齢：20歳

身長：172？

その他：パスタとピッツアと可愛い女の子とサッカーが大好きで、優しく、ヘタレなお茶目さん。臆病で泣き虫。兄がいるが、フェリシアーノ同様、兄もヘタレ。本気を出せばデキるが、なかなか本気を出そうとしない。のほほんとしていて、ルートが（友達として）好き。芸術センスが抜群良い。あと、逃げ足が早い。（兄も同じく）兄との見分け方：アホ毛の向き。

名前：ルートヴィッヒ（苗字不明）

誕生日：不明

年齢：20歳

身長：180？

その他：いつもフェリシアーノの行動に頭を悩まされている苦労人。最近、陽歌も手が掛かるようになったため、胃薬が欠かせないようになった。規律に厳しく、規則やマニュアルにこだわるところがあ。面倒見がよく、大変な仕事や、フェリシアーノの世話や、陽歌の相手をしたりする。ビールが入ると、性格が変わるらしい……。眼鏡をかけているところをよく見かける。

名前：本田 菊

誕生日：2月11日

年齢：不明

身長：165?

その他：自己主張が苦手で、引つ込み思案で、高血圧で朝起きるのが早く、W学園の裏庭とかをうろろろするお爺ちゃん。だが、見た目は凄く若々しい。控え目で、他人の意見に合わせる。いつも「みんなの和を乱したくない」と思っている。そしてよく曖昧な事を言う。実は人見知り。よくアルフレッドに勢いで押し切られているが、案外本人は平気。アニメやマンガ、二次元に関する事は、色々詳しい。(つまりO T A K Uである)

決まり文句(?)：『善処します』『また今度』『答えは全て? いいえ? です!』

今更プロフィールだよっ！ その1（後書き）

参考にしたもの：「学園へタリアモバイル」（性格などのその他）、
「キタユメ。」（人名、誕生日、身長、年齢）

次回から、また話に戻ります。

第三話 陽歌、ムキムキの名前を思い出す（前書き）

今回は長いよー！

では、三話目で言うのもどつかと思っけど、こゝで恒例の注意事項
ー(?)

あてんしょん

- ・ヘタキャラは、みんな人名です。
- ・主人公が、ムキムキの名前を思い出します。
- ・主人公が鼻血出して、気絶します。
- ・主人公が自問自答します。
- ・再びムキムキがアイアンクローをかまします。
- ・主人公が回想を始めます。
- ・ggdgdしています。
- ・感想ください。え
- ・ゆっくり見て行ってね。
- ・主人公は、作者の都合で、腐女子と言う設定です。
- ・主人公は、ヘタキャラの人名を知りません。

以上です。

おきな方は、そのまま進んでくださいな。

では、
本文へ

第三話 陽歌、ムキムキの名前を思い出す

「へえー、そうなんだ。……ん？ 女の子だよね？」
イタちゃんが疑問に思ったみたいだね。……何で？

「そうだよ。一人称はボクだけど、れっきとした女の子だよ」
「いや、そうじゃなくて、何で男子用の制服着てるのかなーって。
しかもサイズもぴったりだし」
「え？」

おう？ 男子用の制服着てるのすっかり忘れてた。
言われてみればそうだね。サイズぴったし。

「いやー、これは……」

説明しようと、三人の顔を見た、その瞬間！ ボクは思い出した
……そう！ あのムキムキの名前を！ そうだ！ ドイツだ！
ドイツだった！

駄目だなあ、ドイツ。枢軸のメンバーで居ないと目立たないなんて。
(ただ単に陽歌が忘れていただけ)

「どうしたのですか？ 陽歌さん」
ボクがドイツの名前を思い出したと言う満足感に浸っていると、
にっただまが話しかけてきた。

「ふえ？ え、いや特に何も。大丈夫ですよ」

「とりあえず、ここで話すのも、気が引けてくる。何処か、別のと
ころで話さないか」

と、ドイツ。
「そうした方が良いですね」
と、にっただま。

「で、何処に行くの？」
と、イタちゃん。

「人気ひとけのないところが一番良いでしょう」
と、にっただま。

「その方が良いな。ならば、裏庭辺りが良いだろう」と、ドイツ。

「そうですね。そうしましょう」と、にったま。

まあ、そう言うわけで、ボクと枢軸組は、(ボクが)何処にあるのか知らない、裏庭に行く事になったのであります。

裏庭

「さて、何故？人間？であるお前がこの学園に入ったのか。その理由を聞かせて貰おうか」

ベンチに座る前に、ドイツにそう言われた。

おいおい、ヴェスト。いきなりドSオーラ醸^{かも}し出すなよなー。(多分違う)

「はいはい。分かったよ、ヴェストー」

と、ボクがおふざけ半分で言ったら、ドイツがかなり驚いてこっちを見た。

「え？ な、何？ 何かボク、イケナイ事でも言った？」

「いや……。ヴェストと呼ぶのは兄さんだけだったからつい、な……」

予想通りの答えキタ (。。(! ! 待ってた

よ、それを！ その照れた顔を！ やべえ……。今なら逝ける

……！ (主に大量出血で)死ぬる………！

「大丈夫ですか、陽歌さん！」

「鼻血の量が半端じゃないよー！」

「お、おい！」
慌てふためく枢軸三人。
あ、やっべ。マジで死ぬかも 見てくれた皆さんお元気で……。
たったこれだけの話を見に来てくれるd（長いので省略）

～数分後～

ボクが目を開けたとき、枢軸三人が心配そうにボクの顔を見ていた。

「お気づきになられましたか、陽歌さん」

あれ？ ここ何処だった？ ああ、『W学園』だったネ。で、何でボクこんなところに……。？ ああ、自分から入って来たんだっけ。んでもって、何でボクベンチ（木製）の上で寝てんの？ そっか、鼻血ばーだったんだよね。

と、頭の中で自問自答を繰り返すボク。

あー、生につたまがちょー近い（ように見える）。やべえ、マジで幸せじゃん、ボク。でももうちょい寝たいな。

と思いき、睡魔さんに意識を託そうとしたところドイツに、

「目を覚ませええええええええええ！！」

と、またアイアンクローをかまされてしまった。

「ぎゃあああああああ！？」 顔が割れるように痛いいいいいいいいい！！！！！！！！」

～三分後～

某カツプラーメンが出来る時間にアイアンクローが終わるとは…
…。ヴェストすげえ。って言うかアイアンクロー二回も喰らって無
事であるボクって一体……？

「ねえ、陽歌ー」

イタちゃんがボクを呼んだ。

「んー？」

ボクは起き上がりながら返事をした。ってか今気づいた。ドイツ
以外、みんなボクの事名前で呼んでくれてるじゃん。あー、幸せっ
「何でこの学園に入れたの？」 というか、何の為に来たの？」

おーっとつとい。すうーっかり忘れてたよ。

イタちゃんに言われて、そういえばそうだったと思い出した。

「確かにそうですね。何故陽歌さんはここに？」

と、にったま。

「話せば長くなるけど、よろしいデスカ？」

「別に構わないが、分かりやすく話せ」

命令！？ 命令なの！？ ……よくよく考えれば、前から命令形
デシタネ。

「まあ、話すよ？」

事の発端は、お兄ちゃんの発言から

だったんだけどね……」

第三話 陽歌、ムキムキの名前を思い出す（後書き）

次回から、陽歌が何故W学園にやって来たのか、という理由を投稿していきます。

全部で三話分ぐらいあるかな？

まあ、また次回

第四話 陽歌の回想 其のいち(前書き)

凄く短いですよ。

では恒例の注意事項！。

あてんしょん

- ・ヘタリアのキャラはみんな人名です。
- ・恋愛に発展することは、今のところありません。
- ・陽歌の兄貴が出てきます。(しかし、名前はでません。考えてないのでwww)
- ・陽歌とその兄のターン。
- ・ヘタキャラは出ません。
- ・gggggしています。
- ・ギャグっばい。
- ・感想、下さい。ぷりーず。よこせ、ほら。
- ・主人公の腐れっぷりはまだ出ません。

以上。

よろしければ、そのまま本文にGO

第四話 陽歌の回想 其のいち

「よし、はる。この制服貸してやるから、世界の何処かにあると言われる『W学園』に今週の日曜日行って来い！」

と、リビングにあるソファで寝転がっている三つ上（20歳）のお兄ちゃんが何処からともなく取り出した制服を見せながら言った。

ちなみに、『はる』とはボクの事。

「やったー！ ありがとう、お兄ちゃん！」

リビングに入っつてすぐの、食卓用のテーブルの前で、ボクは喜んだ。そして質問した。

「……でも何で？」

まあ、そう思うのが妥当だよな。

ってか、急だね。今日火曜だよ？

「お前、行ってみたかったんだろ？ 『W学園』に」

お兄ちゃんはニヤニヤしながら言った。

ヤメテ。キモい。ボクの可愛い目が腐っちゃうじゃないか。

「確かにそうだけどさ、何でお兄ちゃんそんな事知ってるの？（

ヘタリアに興味ないって言うってたくせに？）」

「お前が寝言で、『にったま、にったま』五月蠅いんだよ。ただそれだけ」

そう言っつて体をだるそうに起こす。

ナニソレ。ただ単にボクの寝相が悪いと言ってるみたいじゃないか。（違う）

「それだけの理由で？ ってかなしてお兄ちゃん『W学園』の制服持ってんの？」

ギクッ

「そ、それはだな、た、偶々オークションでう、売ってあったから買っただけだ！　べ、別に俺が好き好んで買ったわけじゃ、な、ないからな！」

「嘘を申すな、嘘を。　伊達に17年妹やってないんだから、それくらい判るよ。　ってか何でそこでイギリス的ツンデレ？」

ギクウウウツ

……お兄ちゃん、ホントはヘタリア大好きなんだね……。　分かりやすい。

「お兄ちゃん……」

「な、何だよ」

ちよつとたじろきながら返事するお兄ちゃん。

「今度一緒にアニメイト行こうね！」

ボクがニツコリと笑って言うと、お兄ちゃんの周りにパアツと花が咲いた（ような気がした）。

余程行きたくてウズウズしてたんだね……。　ちよつと見損なつた。
え

「おう！」

お兄ちゃんは、ニカツと笑って返事した。

プーちゃん並の笑顔じゃまいか、お兄ちゃん。　ヤバイ、ちよつと萌えた……。　実の兄に萌えてしまった。

その時からお兄ちゃんは、おもいつきりヘタリア好きを露わいせにしたのだった。

第四話 陽歌の回想 其のいち（後書き）

次回も陽歌の回想のターン。

長くできるかな……（、・・・、）

第五話 陽歌の回想 其の二(前書き)

さあ、悪魔の期末テストが終わったぞ！

多分バシバシ投稿していくよ！（続きが思い付いたら）

では恒例の注意事項！

あてんしょん

・ずっと陽歌とその兄（名前決まってナッシング）（＾q＾）／のターン！

・ヘタキヤラ出ません。

・何かgdgdしてろ。

・きつと読みづらい。

これくらいですかね。

今回はいつもより眺めですよー！

よろしければ本文へ

第五話 陽歌の回想 其の二

だいたい三日後（金曜日）

「おい、はる！！ 行き方が分かったぞ！」

凄いい勢いでガチャンとリビングに繋がるドアを開けたお兄ちゃんが手に何かを持って、言った。

「え？ 逝き方が分かったの？」

とリビングのソファでゴロゴロしていたボクは、わざと聞き間違えてみた。何故かって？ そりゃあ、

「漢字が違えよ、^{ちげ}ばか」

って言うってくれるからサ

「後で眉毛書いて良い？」

ボクがマジックインキ（油性）を（何処からともなく）取り出して言ったら、

「ヤメテ下サイ」

お兄ちゃんは丁寧に手を合わせながら、そう言って床に土下座をした。

いや、ただ単に萌えただけなんだよ？ ヤンデレなんかじゃないんだよ？ 「ばか」のところ萌えただけなんだよ？

それに、最近よく萌えるんだよ、お兄ちゃんに。

「で、どうやって行くの？」

ボクは座り直して、お兄ちゃんに訊いた。

「聞いて驚くな！ それはだな、^て「考えてすらないくせに……」
……」

ボクはお兄ちゃんの言葉をまたわざと遮った。どうせろくな事しか言わないんだしさ。

「あのなあ、何処まで実の兄を馬鹿にするつもりだ？」
と、呆れ顔のお兄ちゃん。

「んー……。ずっと、かなっ」

と、ボクがお茶目(?)に言うど、

「俺の存在はそーゆーもんなのか……」

と、嘆いていた。

「で、二回も訊くけど、どうやって行くの？」

「それはだな、徒歩だ!!」

お兄ちゃんは目を爛々させながら言った。

マテマテ。よく聞こえなかった。ガキの考え方みたいだったぞ、

クソ兄貴。

「……徒歩？ 徒歩つつた？ 歩いて行ける距離にあるっての？」

「いや、ただ単に自分の知らない道を通っていれば、『W学園』まで辿り着けるらしい。ただ、『W学園』に繋がる道は今の日本を含め世界中を探して、見つかるのは二十本。日本中を探して、見つかるのはたった3本。それを見つけないやなんのだが……」

お兄ちゃんは、片手を顎につけ、もう片手を肘につけ、片目を瞑り、思索しながら言った。

世界中に二十本あるの!? んで、日本中のたったの三本!?

うわぁ、マジか……。結構少ない……。ってかお兄ちゃん何で知ってんだろっ?

「はる、この地図をしてみる」

お兄ちゃんはそう言って、わざわざボクの目の前に来て、ボク達の住む地域の地図を見せた。

あのさ、わざわざ目の前に来なくてもいいんじゃない? テレビ

が見えないよ……。

それには、二本の赤い線が書かれていた。

「もしかして、この赤い線が『W学園』に繋がる道……?」

「ああ、そうだ。だが、この道は既に知っているだろ?」

そう言ってお兄ちゃんは二本の内の一本の赤い線を指差し、その

線を辿っていく。

そこに辿り着いたのは……………。

「小学校？」

「ああ。この道に覚えがあるだろ？」

「うん」

通学路だったからね。

「でもお兄ちゃん。入学式の時、お母さんと一緒に通ったけど、特に何も……………」

「そうか？ けど、はる。何かしら見えたんじゃないのか？」

『見えた』？ …… 『見えた』 …… 『見えた』 …… 。

ボクは記憶の隅から隅までを探り回った。

「ん…………… あ！」

「思い出せたか？」

「いえす！ そうだよ、うん。そうだった！ お母さんと入学式の帰りにこの道を通ってたら、頭の中に突然何かしらの映像が見えたのを覚えてる！」

ボクは、バツと立ち上がって、お兄ちゃんに向かって言った。

「うむ、そうか」

納得したように、腕を前に組んで、うんうん頷きながらお兄ちゃんが言う。

「ってかお兄ちゃん。ずっと立ってて足痛くない？」

「でもお兄ちゃん。あの時は、行けなかったよ？」

「母さんが居て、ヘタリアの事を知らなかったからだろ」

「有り得なくもない」

何でだろう？ お兄ちゃんの発言。何か、どっか引っ掛かるところがいっぱいあるんだけど……………。まあ、いつか

「まあ、残された道は後一本。正確には二本だが……………。あ、ちなみに、いっぺん通った道は『W学園』から帰る事が出来るが、その道をもう一回使おうとすると、普通の道になってしまつから、よく考えてから行けよ、はる」

「うん、分かったー」

「それから、その道を使って、『W学園』に行くと、どうやって来たのか、ということが分からなくなるから注意しろよ」

お兄ちゃん、色々詳しくすぎでしょ……。

「お兄ちゃんは行かないの？」

「行きたくても行けねえよ」

お兄ちゃんは、残念そうに、ため息を突きながら言った。

「お前が通るであろう道は既に通っちゃまってて、無理なんだよ」

「何でそこ通ったの？」

「友達^{ダチ}家がそこを通らないと行けなかったから」

「一人で行ったの？」

「いや、友達^{ダチ}と」

そりゃ行けないよね。

「御愁傷様」

ボクが手を合わせ（合掌し）て言ったら、

「勝手に殺すな」

と、怒られちゃったんでありますっ。

「一度……いや、百度死んどきなよ」

「真顔で言うな、バカ妹」

「バカじゃないよ、クソ兄貴」

ボクとお兄ちゃんは、にっこり笑いつつ、ブラックなオーラを発しながら言いあった。

第五話 陽歌の回想 其の二（後書き）

次回も遅くなります。

陽歌「期待しないでね！」

何でそうなる?!

第六話 陽歌の回想 其のさん(前書き)

今回は短いですよ。(ネタがなかったの)

『W学園』に行く前日です(^^)

では、恒例の注意事項。

あてんしょん

- ・今回もヘタキャラ出ないよ!
- ・まだ陽歌とその兄のターン!(終われ)
- ・陽歌が、フランス撃退用と言う名の危険物を持っていくとするよ!
- ・途中で終わるよ!
- ・ギャグっぽいよ!
- ・ggdgdしてるよ!
- ・兄貴の名前が決まってる。(誰か考えていただけませんか)
- ・出来たら感想下さいな。

これぐらいですかね。

こんなんでも「読んでやるぜ!」って方はどうぞ(^^)

では本文どうぞ

第六話 陽歌の回想 其のさん

翌日（土曜日）

「ところでクソ兄貴ー」

「なんだいバカ妹」

昨日、色々あったからその影響で今日もそんな感じー。（意味不）

「何か要るものってあるの？」

「んー……必需品でも持ってたけ」

お兄ちゃんはサツカーの雑誌を眺めながら自分には関係えねえ的な感じで言った。

「じゃあケータイに、サイフに、筆記用具にノートとメモ帳でしょ？ それから、小型ナイフ（折り畳み式）でしょ、ゴムに、くちばしピン、折り畳み式櫛くし。それから……」

「マテマテ。今、聞き捨てならない物が入っていたぞ？」

お兄ちゃんは、雑誌から目をバツと離し、これまたバツとボクを見て言った。

「え？ 何が？ 気のせいじゃない？ ってかお兄ちゃんの耳が節穴なんじゃないの？」

「いや、小型ナイフつつったよな？ あと、何気に変な事言ってるじゃねえよ」

「いやいや、言ってないよ？ そんな悪態突くような事」

「（認めやがった……）ほんじゃ、もっぺん言ってみるよ」

「だから、ケータイ、サイフ、筆記用具、ノートとメモ帳、小型ナイフ（折り畳み式）、ゴム」やっぱり言ってんじゃねえかよー！ー！「バレたか」

「お前の政経の先生の真似すんなよ」

「いーじゃん。面白いし」

ボクは口を尖らせて言う。

「で、何で小型ナイフを持っていくこうとする？」

と、お兄ちゃんが改めて質問してきた。

「んー……自己防衛？」

「何でクエスチョンマークを出す？ あと、お茶目に言わんでよろしい」

まあ、自己防衛もあるんだけど、その他もあったり〜。

「なんなら言ってみろ」

おやおや、何でボクの思った事が解ったんだい？

「もろ口で言ってるからだ」

「マジかよ〜。何かそういうの最近多いんだよー」

「ふーん。んで、その他の理由は？ フランス避けとか言うんじゃないよな？」

関心ないんだね？

「えー？ 違うよ〜。フランス避けだよー」

「何処が違うんだよ！？ 同じだろ！」

「え？ じゃあ、変態フランスの撃退用ナイフで」

「まるで商品名」

他に何と言えと？

「でも、もし会えなかったらどうするんだよ？」

と、お兄ちゃん。

「まあ、確かにそうだよねー。まあ、その時はその時で、頑張って探すよ」

「探した後でぶっ刺したりするんだな？」

「違うよ。ぶっ刺したり、ぶっ刺したり、ぶっ刺したりするんだよ」

「だから何が違ってるんだよ」

第六話 陽歌の回想 其のさん（後書き）

陽歌「次はいつだ！」

いつかね。

陽歌「曖昧すぎるだろ、だあほ！」

ちなみに、陽歌の政経の先生は、そのまま自分の政経の先生です（笑）

第七話 陽歌の回想 其のよん(前書き)

今回は、前回より長めであります(、フ、)

では、毎回恒例の注意事項ですよ^^

あてんしょん

- ・陽歌とその兄貴のターン!
- ・兄貴、陽歌に飛び蹴りされる。
- ・兄貴は手先が器用。
- ・陽歌が兄貴によって■■■■■されるよ!
- ・そして兄貴を殴るよ!
- ・ggdggdしてるよ!

それでもおk?

ではどござ

第七話 陽歌の回想 其のよん

んで、当日（日曜日）

当日の朝。ボクは自分の部屋（二階）のベッドで目を覚まし、起き上がった。また目覚まし時計より早く起きた。最近よくあるんだよね。

「いよいよ今日だ。長年の夢だった『W学園』に行く事が出来る。

」よし！」

自分に気合いを入れてベッドから降りた。

今日は、朝から『W学園』に行くつもりだ。楽しみだなあ。

そう思いつつ、ボクは鼻歌（リンリンシグナル）を歌いながら、二階を降りる。

え？ 制服はどうしたのかって？ そりゃあ一階にあるに決まってるじゃ……な……い……か……？ ボクはリビングに繋がる扉を開け、いつも学校の制服をかけているところに行った。

だがしかし
駄菓子菓子！！

「あ、あるえー？ 制服がナツシングだよ。ブレザーとネクタイしか見当たらない……。さては、あのクソ兄貴の仕業かっ！」

「はよ」

と、ボクがクソ兄貴を疑っていたちょうどその時、クソ兄貴が欠伸しながらリビングに入ってきた。

「テメエ、制服出せゴラー！！」

「x ^ / ? ! ! ?」

ボクがクソ兄貴の顔に飛び蹴りを喰らわせたら、そのクソ兄貴は、言葉にならない声で叫んだ。

「てめっ、何しやがる！！」

「ボクの『W学園』の制服何処にやった!? 食べたのか!? え
? 何なら吐き戻せー!!」

と、ボクは起き上がった兄貴の胸ぐらを掴み、鬼のような形相で
(と、兄の後日談)言った。

「喰ってねえよ! いくら俺でもそんな化学繊維がたっぷりなもん
は食べん!」

「じゃあ、何処にあると言っただよ!」

「知らねえよ! ……あ」

と、兄貴が何かに気がついたように言った。

「『あ?』 『あ?』がどうかした? 吐き戻した場所でも思い出し
たのか?」

「吐き戻した前提で言っただな。ってかお前、パジャマの下に着て
るぞ、制服」

と、兄貴は呆れ顔で、しかもほっとしたように言った。

「なぬ?! おお! マジだ!」

ちくしょー。ボクとしたことが、制服を着たままパジャマを着て
寝てしまうなど……!

「おい、声に出てるぞ」

「マジかよ、また?」

「いえす。ってか、制服着たままパジャマ着るって……。変な感じ
しねえの?」

「特には」

「ってか制服着たまま寝たって事は、シワがついているんじゃない
?」

「え! ヤバくね!」

そう言っただけボクは、その場でパジャマを脱いだ。

奇跡的に、制服にシワはついていなかった。

驚き、桃の木、山椒の木。

「……お前まさか、朝っぱらから行くつもりか?」

「お主! 何故それが分かった!」

「お前の目を見れば嫌でも分かる」

と、呆れながらお兄ちゃん。

「取り敢えず、まだ早い。冬だぞ？ 今出てみる凍るぞ？」

「むー」

言われてみればそうだなあ。

「暖かくなつてから行けよ？」

「嫌って言ったらどうするのさ？」

「どーしよーもないだろ。あと、母さん達にはどう言うんだよ？

見たこともない制服を着て家出る娘をなんと思うか……。それに、

男もんだしな」

「じゃあ、永遠の眠りにて「駄目だ！ それじゃ死んでしまつたら

?!」「むう……」

永遠の眠りが駄目ならどうしろと……。

「取り敢えず、朝飯喰うか」

そう言つて、バカな兄貴が寝間着のまま、台所に向かう。

しょうがないのでボクは脱いだパジャマを畳んで、引き出しにし
まった。

* * *

「ごちそーさまー」

うん、旨かった。この兄貴……何気に料理上手いんだよねー。

「……何かム力つく」

「何がだよ!? 意味わかんねえよ!」

「あー、気にすんなヨ」

さてと、

「そろそろ行こうかな」

「……」

あれ? ツッコミがないぞ?

「引き止めるとかしないの?」

「いや、行くのは良いけどよ、ネクタイの絞め方、分かるのか?」

「あ。全然知らないや」

と、いうわけでネクタイ絞めてもらいました

「よし、おk」

「流石、お兄ちゃん。んじゃ、コート着て行ってくるね」

と、外に出ようとすると、

「待て」

「ぎゃぷっ」

お兄ちゃんに髪を引っ張られた。

「何するのさ!」

「髪結んでやる。座れ」

と、何処からともなく椅子と鏡と櫛とゴムを取り出し、鏡をボクに持たせてお兄ちゃんが言った。

何から何までしてくれるって……。まるで執事みたいだなあ。

……相変わらず手先は器用だなあ。小さい時、よく髪結んでもらってたっけ……。

「出来たぞ」

そう思い出に浸ひたっているとお兄ちゃんがそう言った。ボクは鏡を見ると、

「何じゃこりゃー!??!?!?!」

両サイドを上の方で結ばれた二つ結び……所謂、いわゆる

ツインテールである。

「な、何をしてくれとんじゃバカ兄貴イ!!!」

バコッ

と、若干鈍い音がした。

おっと無意識の内に殴ってしまったようだ。

「ぐべいっ！ な、何すんだよ、はる?!」

「何するもなにも、コッチの台詞じゃだあほう!! 昔あれほどツインテすんなつっつたる?!」

「昔は昔、今は今。てっきり忘れてると思ってたんだが、それでも

なかったな。あと、なんかお前イギリス（の女体化）っぽいぞ」

「そりやどーも！」

取り敢えず、お褒めの言葉として貰っとくよ！

「全く、油断するとロクな事しないな、バカ兄貴」

ボクはそう言って、ツインテをほどき、櫛で髪をといだ。それからボクは自分でポニーテールに直した。

「せっかく可愛かったのに」

と、口を尖らせて言った。

「黙れシスコン！ ボクはこれぐらいがちょうどいいんだよ！」

ボクはコートを兄貴から引ったくり、羽織って鞆を背負って玄関を出て行った。

第七話 陽歌の回想 其のよん（後書き）

今回は短いかもです（^^；

次回！

陽歌が と逢うよ！

お楽しみに！

陽歌「楽しみにしなくてもいいよ！」

「あらあ！

陽歌「にーげろ」

陽歌兄「んじゃ」

……と、言うわけにはいかず（汗）

この小説の主人公・陽歌の兄の名前を募集したいと思います！

自分で考えてもなかなか出てこないもので、皆さんの力をお借りし
たく存じ上げます（^^）；

次回の話で主人公の兄の名前を出す予定なので、期限はありません
が、出来れば早めに提案してほしいです（^^）；

では、お願いしますm（）——（）m

第八話 陽歌の回想 終了とアイアンクローと自己紹介（前書き）

はい、6日振りです。

その間にウォークマン買って貰いました^^

ヘタリア少ししか入ってないからもっと入れてやる(^q^)

さて、恒例の注意事項！。

あてんしょん

- ・何かやけに長い。
- ・イギリスさんが出てくるよ！（ツンデレなし！）
- ・陽歌の回想が終了するよ！
- ・終了して早々ムキムキルトさんがアイアンクローをかますよ！
- ・（枢軸の）みんなが陽歌に自己紹介するよ！
- ・ムキデレって分かんない！
- ・学園内の案内が始まるよ！
- ・ggdggdしてます。
- ・陽歌の暴走っぷりを書きたい。

ok？

「読んでやっても構わないZ E
」な方も、「え？ 嫌WWW」っ
て方も読んでみてください。

では、GO！

第八話 陽歌の回想 終了とアイアンクローと自己紹介

「うっ………。寒い」

ども！ 一人称がボクの志井菜陽歌デス！！ 忘れてたケド、実は今冬なんだ〜。

さっきから風が軽く吹いている。それが寒い！

「確かこの道だったよね〜」

ボクは地図を見ながら道を歩いていると、前方に何かが蠢もよほいている。

「何じゃい、あれ」

気になったので少し近寄ってみる事にした。

「……………」

……………あれ？ 何か、風景が歪んで見える……………？

「って何でやねん！！」

しかも何かこの辺妙あつたに暖かいぞ。

「って更に何でやねん！！」

ボクはツツコミを入れた後、いつの間にやら場面が変わり、草むら（？）の中にいた。しかも、記憶ねえし仰向けだし。コートは何か分かんないけど着てないし。靴は背負ってるケド、どうやってここに来たんだけ？ んにしてもここ暖あつたけー。

……………でも、ここ何処？

「ちよつくら探索してみようかな」

そしてボクは、起き上がって草むらを抜け出した。

さっきまで気づかなかったケド……………、

「デカ〜……………」

お城か何かですか？

む、あんなところに人影を発見したぞ！ 突撃ー！！

「うおらあああああああー！！！！！！」

と、雄叫びをあげるボク。それに気づいたのか、振り向く誰か。
「え、ちよ、何だなんつてけくぼえ!!」

と、誰かさん。途中、変な言葉になったのは、ボクがタツクルを
仕掛けたからサ

誰かは、少し飛ばされて倒れた。ボクはその人のところに駆け寄
る。

「……あれ？ 瀕死した？」

そこら辺にあつた小枝で頭をツンツンつつくボク。

ツンツン ブスツ

「いてええええええ!!」

その人は、飛び上がって起きた。

「あ、起きた。ごつめーん。手が滑って頭にぶつ刺さっちゃった

」

「『起きた』じゃねえよ！ 殺す気か！ さっきの絶対わざとだ
ろ?! あと、『瀕死した?』とかじゃなくてだな、普通『すいま
せん、大丈夫ですか』って言うところだろーが！」

その人物は、小枝を頭にぶつ刺したままそう言った。その時、ボ
クはその人物を真つ正面から見た瞬間、電流が流れたような感じが
した。

これは！ このボサボサな髪の毛に、緑色の瞳。それから、太い
眉毛……。これはまさしく!

「イギリスだあああああ!!」

そう言っ**て**ボクはイギリスに抱き着く(という飛びつき)。

「な／＼／＼?! 何抱き着いてんだよ!!!? あとイギリスじ
やねえ! アーサー・カーランドだ!」

「ふえ? アーサー? 何でアーサーなの? いぎりちゅじやない
の?」

と、上目使いするボク。

「い、いざりちゅ……?! ってか、何でそんな事を……」

「べはははは!! ボクはヘタリアLOVEだからな!」

ボクはアーサー・カー……なんたらと名のるイギリスから離れ、両手を腰に当て、盛大に笑ってやった。

「意味わかんねえよ! ……ってか、お前……女……だよな……?」

「そうだけど? 何か問題でも?」

「何で男子の制服着てんだよ?」

「おう?」

Oh! すっかり忘れてたんだぞ!

「ちなみに、お前は? 人間? か? それとも? 国? か?」

「は? 何ソレ?」

? 人間?? ホモ!! サピエンスですか? ? 国?? 国家の事デス力?

「お前、分かんないのかよ?」

「うん」

「しょうがねえな。まあ、俺が説明してやらんこともないケドな」
若干どや顔気味で言った。うん、ムカつく

「うん、早く教える。ホラハヤク」

「何で命令系なんだよ!」
いけないのかい?

「ほら教えてよ、アーサーと言う名のイギリス。じゃないとアメリカとの昔の思い出とかを色々暴露しちゃうヨ? 例えば、連合の会議中に居眠りしてたりとか、ビーフをカウって言っちゃったりとかね?」

「何でそんな事知ってんだよ?!」

「だから言っただろ? ボクはヘタリアLOVEだからな! で、早く? 人間? と? 国? について教える」

「しょうがねえなあ……」

「しょうがない」ぢゃないデシヨ? エギリスさん。

「まず？人間？と言うのはだな、俺みたいに？国？ではない、？一般人？の事を言うんだ」

えーと、

「つまり、アーサーはイギリスって言う？国？が擬人化したヤツでそれが人名になった……ってコト？」

もしそうだったらまままへタリアじゃん！ まあ、既にへタリアの住人が目の前に居るわけなんだけど。

「まあ、似たようなもんだな。この学園で過ごす為には、俺たち？国？は？人間？の名前を使わんにゃならん。」

……ところで俺からの質問だが……。お前は何処のどいつで、どうやってここに来た？」

アーサーは、腕を胸の前で組んでボクに疑わしげに質問してきた。「じゃあ、ボクは日本から来た？人間？の高校生で、志井菜 陽歌と言う者だよ！ どうやって来たかなんて、逆にボクが訊きたいよ！ くたばれ、アーサー」

ボクは敬礼をしながらアーサーの多い質問に答えてやった。

「志井菜、か。懐かしいな」

は？ 意味分かんない。あと、ツツコミがなかったよ？

「何言ってるの？」

「お前、家族に陽輝ってヤツいないか？」

「……え？ 何でお兄ちゃんの名前知ってるの？」

「知ってるも何も、なあ……。前に……。だったんだからな」

何？ ちょうどいいところが（風に吹かれたせいで）聞こえなかったよ？

「え？ 何だつて？」

「な、何でもねえよ……。」

そんじゃ、もうそろそろ帰れよ。兄貴が心配してるぜ？

と、フツと笑って言った。……萌える！

じゃなくてサ、いや、まだ朝なんすけど？

そう思っていると、スタスタとアーサー（と言う名のイギリスさ

もしや……まだあの事を引き摺っているのか……？ だったら萌えるな……（＾q＾）

「陽歌さん？ どうかしたのですか？ 遠くを見つめているようでしたが……」

「ふえ？！ あ、いや、何でもないんです、日本さん」

「そうですか……。あの、陽歌さん」

「ほえ？ 何ですか、日本さん」

「私は日本でもありますが、ここでは本田 菊と申します。以後、お見知り置きを」

「す、凄くご丁寧です……。本当に同じ日本人なんでしょうか……」

「……つまり、人名……って事ですか？」

「まあ、そういうことになりますね。アーサーさんが仰おっしゃっていたように、ここでは皆さんは人名になるのです」

「ほえ……」

「覚えるの大変そうだなあ……」。

「取り敢えず、きちんと自己紹介しましょう。陽歌さんに自己紹介させておいて、私たちだけしないというのはとても卑怯な事ですからね」

「ああ、そうだな」

「じゃあじゃあ俺から！ 俺はフェリシアーノ・ヴァルガスだよ。パスタとピッツアが大好きなお茶目さんです」

と、いつも（？）みたく、手を動かしたりしながら言った。

あと可愛い女の子とサッカーも好きだよ。あとローマ爺ちゃんとか。

「フェリシアーノちゃんは何と言えがいい？」

「何でも良いよ」

「んじゃあ、フェリちゃんです」

「うん、良いよ」

よし、フェリシアーノちゃんはフェリちゃんです決まりだね！。

「じゃあ、俺は改めて、陽歌ちゃんって呼ぶね」

「うん、いいよ」

「では、菊。次は俺でいいか？」

「はい、どうぞ」

「改めて自己紹介する。俺はルートヴィツヒだ。ルートでもなんとも、好きなように呼べ」

と言われたので、

「じゃあヴェストー」

と言うと、

「それはやめてくれ」

と即行で却下された。

「けちー。じゃあ、ルートで」

「それなら良いだろう」

意外と素直だね、ムキムキルートさん。

「では、俺はなんと呼べばいい？」

「何でもいいよ」

「うむ……。では、陽歌………でいいか？」

少々照れながらルートさんが言った。

陽歌に 萌え死に フラグが 立った !!

「うん、いいよ。ルート。ボクまた萌え死にしそうだよ」

「死ぬな?!」

ムキデレ、ムキデレ。はい、ムキデレまじ最高だ(^ q ^)

「では、最後は私ですね。」

ルートさん同様、改めて自己紹介させていただきます。私は本田

菊です。趣味は空気を読み、発言を慎む事です」

それ、(いつも思ってたけど)趣味って言えるのかなあ……。

「本田さんはなんて呼べばいい？」

「何でもいいですよ」

と、ニコツと笑って言った。みんな何でもいいって言うよね……。

「ん……じゃあ、菊。で、いい？」

「はい。では、私は改めて陽歌さんと呼ばせていただきますね？」

「うん、良いよ〜！」

「では、学園内を案内しましょうか」

「うむ、そうだな」

「陽歌ちゃん、こっちだよ〜」

「え？ ちよ、何処に?!」

フェリちゃんはそう言っただけの手を取り、走り出した。

第八話 陽歌の回想 終了とアイアンクローと自己紹介（後書き）

Q・つぎはいつでじょうじゅ？

A・分からない！

第九話 保健室の赤い瞳（前書き）

さて、お久しぶりです。

夏休み、終わりますね〜。

自分（の夏休み）は既に終わったも同然ですが……。

皆さんは良い夏休みを過ごせましたか？

では、注意事項。

あてんしょん

- ・ ちよつとただけだけど、兄ちゃん出るよ！
- ・ フェリちゃんが陽歌にラリアットされるよ！
- ・ ルートがフェリちゃんに■■■■（ピーー）するよ！
- ・ 陽歌と菊様が2424するよ！
- ・ 陽歌がまたもやアイアンクローされるよ！
- ・ 赤い瞳の貴公子が登場！

以上です（´・`）

それでも良いですか？

いいならばどうぞー

第九話 保健室の赤い瞳

前回に引き続き、只今ボクは絶賛フェリちゃんに手を取られて引つ張られているのであります。

フェリちゃんの手つて、結構大きくなって温かいんだよ？ ルートはデカくつてもゴツゴツしてそうだけど。

「フェ、フェリちゃん！ 何処に行くの？ ルートと菊は置いていていいの?!」

「大丈夫だよ」

どっからそんな自信が湧いてくるんデスカ……。

そんな事を話しながら、走っていると、あるところに着いた。

「……ここ、何処？」

「生徒会室だよ」

生徒会室、だと………？ 楽しそうなニオイがプンプンしてるじゃないか!!! 楽園の予感だよ!!! 一方で、何か嫌なニオイもプンプンしてるよ。……ナンデ？

ガラガラガラ

そんな事を思っていると、フェリちゃんが生徒会室の扉を開けた。「チャオー。遊びに来たよ」

ボクはまだ顔を見られたくなかったから、慌ててフェリちゃんの後ろに隠れた。

「よお、フェリシアーノ。どうし………って後ろにいるのは？」
「げっ。この声は……」

「あ、フランシス兄ちゃん」

「フランシスじゃないかあああああああ!!! いやー！ 逢いたくないよ〜！」

「後ろにいるのはね〜は「じゅっ!?!」
必殺! 光の速さでリアット!!!!!!
いくらフェリちゃんであろうとも、フランスに逢うことは許しは
せん!!!」

ピシヤッ

ボクが生徒会室を後にした後、急いで来た道を通って、フェリちゃんを引き摺ってルートと菊の元に逢いに行った。

「……陽歌さん?」

「どうかしたのか? 陽歌」

陽歌は ルートと菊を 見つけた !

「フランスやだよ!」

ボクは真っ先にルートのところに行って抱き着いた。

「フランスがどうかしたのか?」

ルートはボクの頭をくしゃくしゃと撫でながら言った。デカイ手です。お父さんみたいだ。お父さんと言えばスーさんだ……。会
つてみたいもんだ。

ってかボクに抱き着かれてなんとも思わないんだねー。やっぱり
フェリちゃんに慣れてんのかなあ。

「生徒会室に行かれたのですか……」

「ところでフェリシアーノはどうした?」

「ここ」

ボクはルートから離れ、ボクの腕の中でぐったりしているフェリ
ちゃんを差し出した。

「フェ、フェリシアーノ!!!?」

「フェリシアーノくん!?!?!」

「うう〜……パースター〜……」

「だ、大丈夫だよ、ルート。気絶しているだ、だけだからっ」

「取り敢えず保健室に……!」

……なんか、イケナイ事しちゃった感じ……？
……まあ、取り敢えず、ルートがフェリちゃんをお姫様抱っこして、保健室に向かっているの、ボクは菊と一緒に後ろについて行く事にした。

保健室に向かっている途中。

「ねえねえ、菊」

「はい、何でしょう？ 陽歌さん」

「あの光景さ、めっちゃ萌えるよね」

「そうですね とても萌えます」

「おー、菊様につきり。……いや、前言撤回。凄くニヨニヨしていらっしやいます。そんな事を言ったらボクもニヨニヨが止まらないんだけどね」

「写真、撮っておきます？」

すると、菊様が何処からともなく出してきたデジカメを見せ、目を光らせながら言った。デジカメって必需品だよねwww

「いいね、それ とつてもいい考えですよ、菊さん」

後で現像して、写真貰おっと

写真を撮ったあと、菊様が、

「（それにしても何故あのお二人はあんなに仲が良いのでしょうか？）」

と、ボクに疑問を小声でぶつけてきた。

「（菊と逢う前（WW1の頃）に色々あったんだよ。きっと）」

「（その『色々』とは、何でしょうか？ 気になりますね……）」

「（今度聞いてみるよ）」

「（是非ともそうして頂きたいものです）」

そんなこそこそ話を菊様としていると、保健室らしき教室の前ま

で来た。

「よし、(保健室に)着いたぞ。大丈夫か？ フェリシアーノ」

「うう……。お腹空いたよう、ルートお。パスタ食べたい……」

「駄目だ。暫く安静にしている」

何コレ、何この会話……！！ 萌え要素が滲み出てるよ！ しかも未だにお姫様抱っこしてるし！

ガラガラガラ

「失礼する」

菊さんが保健室の扉を開け、ルートが入ってそう言った。

「残念だが、今先生は居ないぜ？」

何処からか若干しやがれた感じの聲がした。

うん、聞き覚えありまくりだよ

「お？ ヴェストじゃねえか！」

姿もちゃんと見たよ！ 白銀の髪に、萌えるような……ゲフンゲフン、訂正。燃えるような赤い瞳！！

「に、兄さん……。一体何をしにここへ……」

プーちゃんだ！ プーちゃん！！ ボクこれでもプーちゃん結構好きなんだよ！

「何って……授業をサボりに……。おい、ヴェスト。何でフェリちゃんお姫様抱っこしてんだ？」

「……成り行きだ」

ルートが目を逸らして言った。

「ところで、菊」

「はい、何ですか？ ギルベルトさん」

「お前の後ろにいるのは誰だ？」

「ああ、彼女は陽歌さんです。W学園内の見学中です」
何やら色々省いて下さった菊さん。やっぱり優しいね
ってかプーちゃんはギルベルトって名前なんだね！

「えと、陽歌です。色々あって、W学園内を案内してもらっていますっ」

ボクは菊の後ろから出てきて、プーちゃんにペコリとお辞儀した。
「ほー……………」

と、言いながらボクの顔を凝視する。

な、なななな何すか、ギルベルトさん！ ボクの顔に何か付いてます？！

「俺はギルベルト・バイルシュミットだ。よろしくな」

「えと、プーちゃ……………じゃなかった。ギルベルトさんは何と呼べば良いですか？」

「別に何でも良いぜ。ギルベルトでも、ギルベルト様でも、バイルシュミットでも、」

「不憫でも？」

「そうそう……………って違い！ 俺は不憫じゃねえよ！」

「じゃあ、亡国不憫^{プロイセン}」

「不憫と書いてプロイセンって読むんじゃないか！」

あ、分かった？

「とにかく、俺の事はギルベルト様と呼べ！」

「却下」

「即答かよー？」

「じゃあギルね、ギル。決まり。ギルベルトは、ギルになりました」

「勝手に決めんなー！！」

勝手に嘆いてるヨ

「……………これでよし」

ギルと話しているうちに、いつの間にやらルートがフェリちゃんをベッドに寝かせたようだ。見たかったー……………お？ 菊さん、デジカメに撮ったんですか。菊がブイサインを送ってきた。うむ、後で見せてもらおう。

「さて、陽歌。訊きたい事があるんだが」

「へい？」

ルートさんに質問されました。良い雰囲気ではありません。すんごくヤバい感じだよ。

「フェリシアーノに何をしたんだ？」

「え、えと……………ら…」

「ら？」

「ら、ラリアットを……………しましたすいませんだからアイアンクローは勘弁んんんん！！」

「お前は何度アイアンクローをされれば反省するんだっ！！！！」

「ルートさん落ち着いて下さい！」

「ヴェ、ヴェスト…………？」

俺でさえヴェストにあんなのされた事ねえのに、無事でいる陽歌ってすげえって、マジでフリッツ親父並に尊敬すると思った。（ギルベルト後日談）

アイアンクローは10分後に収まりました。

「いやいや、長すぎだろっ！」

「……………陽歌さん？」

「はっ」

いけない、いけない。地の文につっこんじゃダメだ、うん。ダメダメ。まだ菊と二次元について語り合うのは楽しみにとっておきたいんだっ！！

「とりあえず陽歌。そこに土下座しろ」

「へ、へい！ 隊長！」

ボクは直ぐ様ルートの前で土下座した。

「陽歌。何故、フェリシアーノにリアットをかましたんだ？」

拷問されそうデス……。だってもう雰囲気やヴァインだもん。

Help me! ギルプーちゃん! ……あ、目を逸らされた

……。

「え、えと……その……生徒会室に行ったら、ふ、フランスが出てきやがったから……」

「その理由でフェリシアーノにリアットをかましたのか？」

「は、はい……」

「それならば何故フランスにやらなかったのだ!」
はい?

「え、だ、だってだって。生徒会室にいる他の人たちにまだ顔を見られなくなかったんだもん!」

「何故だ?」

「だって出逢いフラグは大事だもん!!」

第九話 保健室の赤い腫（後書き）

次回！

いつか投稿します！

陽歌「早めにね」

……へい。

第十話 二次元とは何か。菊とボクが語ってやるんじゃないか！（前書き）

はい。お久しぶりです。風邪気味のネコです。

鼻水・咳がっらいです。

さて、毎回恒例の注意事項ですよー

あてんしょん

- ・ 枢軸？もちろん出るさ！
- ・ 兄貴は名前だけ。
- ・ 今回は菊視点。
- ・ アーサー視点も入ってます。
- ・ 二次元とは何か。

これぐらいですかね。久々の投稿なので、あてんしょんの内容忘れてます（；、）

ではござ

第十話 二次元とは何か。菊とボクが語ってやるうじやないか！

前回、ギルベルトさんと陽歌さんが出逢いました。出逢いフラグは大事ですよね。

陽歌さんは、フェリシアーノくんにラリアットをかました事で、ルートさんに10分間アイアンクローされ、拷問されかけていました（正確にはされていません）。『死にそうやったノ（^q^）』らしいです。いやはや、爺には耐えかねません。若いつて、良いですよね……。それにしても、アイアンクロー、5分毎ごとに増えてません？

皆さん、こんにちは、こんばんは、おはようございます、本田菊です。

只今陽歌さんがルートさんに二次元とはなんたるかを熱弁しております。参戦したくてうずうずしますね。でもしようにも無理なんですよ。ギルベルトさんが止めるんです。なのでしようがなく引込んでいます。……が……。

「長い、ですねえ」

「だな……」

「かれこれもう三時間は経っています」

「授業が潰れて良いんだが………これを見るのは暇だな……」

「気づけば放課後ですもんね……」

「だな」

そう、今放課後なんです。陽歌さんがW学園こくに来てから早いもので五時間経つんです。二次元の話はいつまでも尽きませんね、陽歌さんは。

それにしてもフェリシアーノくんは寝すぎです。そろそろ起きてもよろしいかと思うんですが……。流石のルートさんの顔にも疲れ

が見えています。オールバックも乱れてきています。そろそろ止めましようかね。

「あの、陽歌さん」

「だから、ヘタリアはー！ ん？ なぁに、菊」

「おや、どうやら私の知らない二次元のお話をしていたようです。

私の知らない二次元など、あるはずがないのですが……。

「そろそろお止めになられてはどうです？ もう夕方なんですよ？」

「え！ じゃあもう帰らないと！」

陽歌さんは左手首に付けたシンプルな腕時計に目をやり、そう仰おっしゃいました。

「帰るって……どちらへ？」

「決まってるじゃん！ 元居た町にだよ！ じゃないとお父さんとお母さんが心配するし！ お兄ちゃんも例外として！」

この台詞……同じではないですが、似たような台詞を前にも聞いた覚えがあります。誰だったのでしょうか……。

『■■■くん、帰るとは……どちらへ？』

『決まってる！ 元居た町に帰るんだ！ そうでなきゃ親父とお袋とまだ小さい妹に心配かけちまうだろ！』

誰だったのでしょうか……。年のせいか、あまり覚えてないですね……。何故か彼の名前だけ出てきません。顔も臃おぼろげ気で……。ただ憶えているのは、陽歌さんと似たような方だったということぐらいですかね。

「……………菊？」

「え、あ、はい。何ですか？」

「いや、なんかボーツとしてたから。あと、その間にフェリちゃん起きたよ。まだ寝ぼけてるけど」

そう言っている陽歌さんのポニーテールをフェリシアーノくんがくわえています。しかもいつの間にか陽歌さんがフェリシアーノくんをおぶっています。結構力持ちなんですね、陽歌さん。爺には到底無理です。ぎっくり腰になってしまいます。

「パスタ〜。もふもふ……」

「誰かへるぷ」

「すみません（すまないな）（すまねえな）、それは無理です

（だ）」「」

「みんなヒドウイ！」

何故ギヤ マン 日和……？

教室

「さて、教室まで戻って来ましたが……」

随分と日が暮れ、教室に生徒は誰一人居ません。教室は静寂が支配し、非常に静かです。

「やはり、皆寮に帰ったか……」

ルートさんが寝ぼけていたフェリシアーノくんを陽歌さんから受けとり、肩に担いで言いました。

「寮？ みんな寮暮らしなの？」

陽歌さんがフェリシアーノくんに尋ねます。

「うん、そうだよ。ちなみに、俺はルートと同じ部屋」

フェリシアーノくんは陽歌さんにブイサインを送りながら言いました。

「私はアメリカさんと同じ部屋です」

「ふえ〜。……『アメリカさん』?」

「すみません。陽歌さんはアメリカさんのお名前をご存知ない思
ったので……。あえて国名で呼んでいます」

「そっか。まあ、今菊が教えたら面白味がなくなるしね」

面白味……ですか……。

「そういえばルートさん、まだ身支度してませんか?」

「ん、ああ。そうだな。やってくれるか? あと、フェリシアーノ
の分も」

「分かりました」

「菊、ヴェストのは俺がやるから、フェリちゃんの分をよろしくな」

「はい。助かります、ギルベルトさん。お願いします」

「おう、任せとけ」

そう言っただけでギルベルトさんは二カツと笑って言いました。……そ
ういえば、彼はギルベルトさんに似た笑い方をしていたよいな気が
しますね……。あまり思い出せないのですが。

数分後

やはり、手伝ってもらった方が早く終わりますね。ちなみに、私
とギルベルトさんの荷物も各自でまとめました。

私とギルベルトさんが、ルートさんとフェリシアーノくんの荷物
をまとめている間、陽歌さんは、ルートさんに担がれているフェリ
シアーノくんを弄っていました。

「ねえ、フェリちゃん」

「なあに?」

「ここ(くるん)、引っ張っていい?」

「え」

「嫌なら嫌って言いなよ」

「陽歌ちゃんに引つ張られるのは別に良いんだけど、出来れば今の体制で引つ張るのは止めてほしいなあ」

フェリシアーノくんは未だルートさんの肩に担がれている状態なのですが……頭に血が昇らないのでしょうか？

「分かったよ。じゃあまた今度ね」

「菊とおんなじように答えないでよー。今度つていつなのー？」

「今度は今度。ボクが実行するまで今度は続くの」

「何か、難しいねえ……」

とちよつと困り顔なフェリシアーノくん。

「お前たちな……」

と呆れ顔なルートさん。

「おい、菊。準備完了だぜ」

そんな会話を聞いているうちに、ギルベルトさんはまとめ終えたようです。

「ありがとうございます、ギルベルトさん。私もちょうど終わりましたので、そろそろ行きましょう。ルートさん、フェリシアーノくん」

「うん！」

「そうだな」

と、少しホツとした様子のルートさん。

「えっとさ」

陽歌さんが腰に手を当て、私達に言いました。

「ボクはどうするのさ？」

……肝心な事を忘れていました。

本田菊ら五人が保健室に居る間、陽歌に最初に出逢った、アーサー・カークランドは午後の授業が終了した後、アメリカに呼び出しを喰らい、会議室　　もとい、生徒会室に向かっていた

……。

「ったく、今日は早めに帰って刺繍しながら優雅に紅茶を楽しもうと思っていたのに、アルのヤツ……！」

ちくしょー、イライラする。……けど、珍しいよな。俺の話に興味を持つんなら、明日雪でも降るんじゃないか？　つつか、そのお前！　その読者！　俺の刺繍が「少女趣味wwwマジウケるしwww」とか言うな！　思うな！　これは紳士のたしなみなんだからな！　そういえば、アイツら午後の授業居なかったが……大丈夫なのか？

それにしても……。

(妙だな。俺だけアイツの事を憶えているだなんて……)

アルも「何だい？　それ」って言ってたし……。何故誰もアイツの事を憶えていない？

生徒会室(会議室)

「やーっと来たんだぞ」

「やっとつてな、お前……」

「なあ、アーサー。早く話してくれないかい？」

アルが急かす。だが、俺は気になる事がある。生徒会室こいむろにいるのは、俺とアルだけのはずだが……？　やっぱアイツら居たんだな……。

「お前ら、気になるんだったら素直に出てこいよ」

「あいやゝ。バレちまたあるか」

「だから言ったじゃない。隠れてもすぐに見つかるって」

「お兄さんは大丈夫だと思っただけだなあ」

それぞれ、机の下やら天井、ロッカーに隠れていたようで、そこから三人が出てきた。

上から王、イヴァン、フランススである。

「せっかくみんなを隠したのに、すぐバレるだなんて……。君たち、もうちょっと隠れる努力をしないのかい？」

アルが口を尖らせて言った。

主犯はお前か。

「それにしてもよく分かったな、アーサー」

「俺をなめるな、髭」

「あへんは変な能力持つてるある。多分それある」

「ああ、なるほど」

納得するな、させるな。

「それで、話って何かな？」

とニコニコ笑うイヴァン。

「ああ、そうだった。」

「……………なあ。アイツの事、憶えているか？」

「……アイツ？」

皆は一斉に口を揃えて言った。

「アイツって、誰の事だい？」

とアル。疑問に思うのもしようがない。名前を言ってないんだからな。

「陽輝って奴、憶えているか？」

俺はこの場にいるみんなに聞いた。

第十話 二次元とは何か。菊とボクが語ってやるっじゃないか！（後書き）

次回は！？

陽歌がヘタリアが嫌いになるよ！

……嘘です。そんなわけありませんよ（^^）

次回、にーに視点ですよー。

投稿？さ、さあ、いつだろうねえ……（^^）；

第十一話 「議題はどうする?」「後で考えます」「(前書き)

こんちくわ!ネコです。

約二週間ぶりです。

ほんでは、恒例の注意事項ー!

あてんしょん

- ・今回はにーにとフェリちゃん視点。
- ・メリカと不憫は空気。(しかもメリカにしては珍しくおとなしい)
- ・やっぱりgdgdしてる。
- ・何故か最後の方はシリアスになる。
- ・感想ください、ぷりーず。

こんな感じっす(^^)

では、それでも「大丈夫だ。問題ない(、・、・、)」「+」な方は次へ。「えー、それは無理だよお」な方も次へ。

わがままでサーセンm() () m

であであ(^^)() /

第十一話 「議題はどうする?」「後で考えます」

前回、あへんが我^{わたし}たちを呼びだしやがったある。正しくは、アルフレッドに、会議室に行つて隠れると言われ、その結果見つかっただけあるが。

「■■■つて奴、憶えているか?」

「……は?」「……」

「だから、■■■つて奴、憶えているかつて聞いてんだよ」

「ちよと待つある、あへん。お前は何を言つてるあるか?」

「は?」

あへんが首を傾げ、お前らこそ何言つてんだ? とでも言いたそうな顔をしたある。

「お前はさつきからよく分からん単語を言つてるある」

「そんなはずがないだろ!」

とあへんはキれるあるが、我^{わたし}が言つてる事は本当ある。あへんの言つている意味が分からないある。よく聞き取れない単語が混ざっているせいか、本当に何を言つてるのかよく分からないある。

「確かに僕もはつきり聞こえなかつたよ。■■■つて何?」

「分からないのか? ■■■だぞ、■■■」

あへんが再度よく分からん単語を連発するある。

「分からないよ。だつて君が言う、その単語に別の何か変な音が混ざつて聞こえるんだから」

「……どういう意味だ?」

「んー。言葉に靄^{もや}が掛かつてる感じかな」

イヴァンの言う通りある! 我^{わたし}もそんな風に聞こえてたある。

「……そうか」

と、あへんが落ち込んだ様子で言った。

「あのさあ、話変わるんだけど……」

と、ちよつと控えめにフランススが挙手する。

「何あるか？」

「昼休みにフェリシアーノ来たよな？」

「それがどうしたんだよ？」

と、あへん。

「それでさ……一瞬だけど、も一人来たよな？」

「そういえばそうだね。制服は僕らと同じ男子制服だったけど、その子、髪が長かった気がするなあ」

と、ニコニコ微笑みながらイヴァンが言った。……イヴァン、お前動体視力良いあるな……。我わたしはよく見えなかつたよ。

「まさか……！ アイツいつの間に……」

どうやらあへんは昼休みに来たフェリシアーノと、もう一人の来訪者に心当たりがあるみたい。あへん、お前いつそいつに出会ったあるか……。

奴の謎は深まるばかりある。

生徒会室でよく分からん状態の頃、陽歌と枢軸一行は教室で思案にくれていた。

「……どうしたら良いものか……」

ルートが眉間にシワを寄せて考えてる。

「そつですねえ……」

菊もだあ。

あ、挨拶遅れたね。俺、フェリシアーノ・ヴァルガスだよ。そういえば、みんな何に悩んでるのかなあ？

「ねえ、ルート、菊。考えてるところすまないんだけど、フェリちゃん何でみんなが考えてる事が分かんないみたい」

ヴェヴェ！？ 何で分かつちゃったの！？ 陽歌ちゃん、超能力者かなあ。そうだったら凄いなあ！

「フェリシアーノ！ 今は真剣に考えるべきだぞ！」

陽歌ちゃんに感心していると、ルートに怒られちゃった。

「考えるって、何をー？」

俺が言うと、ルートが手を額に当てたよ。何で？ 疲れてるのかな？ 後で寮に帰ったらマツサージしてあげよー

「フェリシアーノくん、今は陽歌さんをどうするべきか考える時なんですよ」

「あ、そうなんだ！」

そういえばそうだった。陽歌ちゃんは別のところから来たから寮には帰れないだったっけ。

「でも何で考える必要があるの？ 特別に寮に入れてもらえれば、それでいいじゃん」

「……その手があつたか（ありましたか）！」「」

俺が言うと、三人とも俺を見て納得したように声を揃えて言った。

「それもそうですよね。何せ、陽歌さんは■■さんの妹ですからね」

「え？」

「ヴェ？」

ニコニコしながら「きつと特別な扱いをして下さいます」と言う

菊。■■って何？ 菊ウチの家の言葉？

「おい、菊……。何を言っているんだ？」

「え？ 私……。何か言いました？」

「今言つてたよ！ ボクのお兄ちゃんの名前！」

「私は貴女のお兄さんは知らないのですが……」

「知らないってどういう事……？ その口からお兄ちゃんの名前

が出たのに」

あれ？ 陽歌ちゃん、兄ちゃん居たんだ。あ、でも。初めて聞く感じじゃないんだよなあ……。何だろ？

「そんな事より、早く寮に行かない？ ね？」

俺はちよつとこの空気が嫌になった。だから、三人に声を掛けた。

「しょうがない、行くか。菊、陽歌行こう」

「はい」

「……」

「わーい、行こー！」

「フェリシアーノ、はしゃぐと転けるぞ」

「大丈夫だよ！」

この時、俺は聞こえてなかった。陽歌ちゃんが呟いた言葉が。

「……どうして、みんな気づかないの？ 分からないの？」

「どうしたの、陽歌ちゃん。行こうよ」

そう呟いたのも知らず、俺は陽歌ちゃんを呼んだ。

「あ、うん。今行く！」

陽歌ちゃんはその時何を思っていたのだろうか。今更だけと思っ
た。

そつえば……。誰か忘れてるような……？

「あー、一人楽しすギルゼー！！」

ギルベルトの声は誰にも届かずに消えていった。

第十一話 「議題はどうする?」「後で考えます」「(後書き)

次回は!

陽歌とルート視点でいく予定です。

言っておきます。更新は亀です。あまり期待は……。あ、してないの?しかも更新亀なのも知ってる?マジか。

陽歌「真面目にやりなよ」

……善処します。

第十二話 れっぴートウ寮！！（前書き）

お久しぶりですだ。

ではでは、毎回恒例の注意事項です（^^）

あてんしょん

- ・相変わらずgdgdだよ！
- ・今回は陽歌とルートの視点だよ！
- ・何かちよつと長いよ！
- ・陽歌があの子二人を見て失神しちゃうよ！
- ・寮に向かうよ！

みたいな（笑）

ではどぞー

第十二話 れっつごートウ寮！！

前回結局、ボクと枢軸三人は寮に向かうことになった。

「寮も寮で、デカくない？」

「そうか？ 俺たちは普通だと思っただが」

そりゃ学園に比べれば小さいけど……。この寮はちょっとした豪邸だよ。それか金持ちの別荘とか。

あ、ども。ボク、陽歌はるかです。苗字と年なんか覚えてくれてないよね……。まあ、そんな事より、今ボク達は学園の敷地内にある寮の前に来てるよ。かなりデカイよ。売ったらどれぐらい価値が……。ゲフンゲフン。何でもありません。ウチ、貧乏なもんで。つい。

「寮長は許していただけでしょうか……」

「どうだろうな……。だがダメ元で訊いてみるしかないだろう」

「そうですね」

菊とルートの話を聞いた感じだと、どうやら寮長は厳しい人のようだ。一体誰だろ……。？ ゲルマンさんとかじゃ……。ないよね。

寮内

「みんなお帰り〜」

「ただいま戻りました、寮長」

「寮長だなんて堅苦しいWWW寮長なんて今だけやん。俺は気軽に行きたいんやけどなあ」

り、寮長って……。親分！！！？？ど、どないなつとんねん！？
「陽歌さん、アントーニヨさん……。いえ、『スペイン』さんは正式な寮長ではないんですよ」

「え、そうなの！？」

なんでも菊が言うには、今この寮長が海外旅行に行っている（いつ帰ってくるか分からない）為、寮に住んでいるW学園の生徒みんなで三週間毎ごとに代わって『仮寮長』をしているんだとか。しかも寮長が一人で二人分の仕事をしていたので、必ず二人組でしなければならぬそう。ちなみに、二人組はルームメイトとしなければならぬらしい……。寮長って一体何者……？

それから、『仮寮長』に選ばれた二人は三週間学園に出席出来ないが、単位はちゃんと貰えるらしい……。何ソレするいな（＾q＾）
ちなみに、菊の当番はまだなんだって。

「実は寮長、頼み事があるんだが、聞いてくれるか？」

「おお、ええで。寮の許可関係ならロヴィーノが居おらんと俺が許可しても意味がないけどなあ」

ニコニコと笑う親分。やべえ……。親分テラカワユス……。*、
、

そういえばロヴィーノって誰ね？ 親分とセツトって考えると、ロマーノかな？

「実は、俺の後ろに居るコイツをしばらく寮に泊めてやってほしいんだ。コイツは別のところから来た？人間？だ」

ルートさんがボクを親分の前に引き出す。

「ふーん……。ふんふん。俺はええで。許可するわ。後はロヴィーノの判断次第やな」

親分はボクをまじまじと見てから笑顔で言った。

笑った顔が可愛すぎる（＾q＾）是非ボクの嫁になつたって！

是非ボクの嫁に！

「ほな、名前教えてくれへん？ 俺の名前はアントーニヨ・ヘルナデス・カリエドや。覚えにくいかもしれんけ、名前だけ覚えてて

「や」

「ぼ、ボボボボクはっ、志井菜陽歌しいなはるかって言いますっ！」

「そんな緊張せえへんでもええのに（笑）ああ、あともう少ししたらロヴィーノが帰ってくるからちよつと待っててな〜」

駄目だよ、親分！ そんな笑顔でこつち見られたら、ボクはッ！

「あの、アントーノ」おーい、アントーニヨ。帰ったぞー……ってジャガイモ野郎！ 何でお前がここに居るん……だ……よ……？」……（、、、、）

は、話しかけようと思ったのに……！ 誰だチクシヨー！ と思いい、振り返るとそこには、ヨーロッパでよくあるような茶色い紙の買い物袋（若干トマトが覗いている）を持った買い物帰りらしいロマーノがこちらを見てきよとんとしていた。

……ロマーノ、お前結構男前やないかいッ！

と、思っていると、ロマーノがこつちに寄って来て、顔をまじまじと見られた後、（買い物袋を持ったまま）親分のところに戻って、何やら話し始めた。

「……、ア……ト……。コイ……は……？」

「こ……はし……ら……で泊ま……定の子や」

「……許……は？」

「お……ぶん……可……したで。後は口……ー……だけ……で」

「……そうか。じゃあ、決断を下すか」

お？ 話がまとまったか？

「おい、その男の格好をした奴！ お前をしばらく寮に泊める事を許可するー！」

「ほえ？」

「陽歌さん、ここに泊まれる許可をいただいたのですよ」

「あ、うん。分かってるんだけど……」

何でろうっ……。今胸が撃たれた感じになったぞ？ あとクラクラしてきた。

「陽歌さんー！」

ほえ？ 何？ 何か眠……………。

「陽歌ちゃん！」

「陽歌！」

「お前……………」

ほえほえ？ みんなの声が遠く……………。ロマーノ…………？ 何でび
っくりした顔してるの？ ってか意識がぶっ飛びs

そこから陽歌の意識はぶっ飛んだ。

突然、陽歌が倒れるという事態に陥った。菊によると、ただ気を失っただけらしい。しかし、何故そうなったのかそれは菊でも分からないようだ。それにしても菊の家の医療技術は凄いな！ 俺も見習わねば……………。

ああ、挨拶が遅れた。俺はルートヴィヒ。ルートでいい。たつた今寮にある医務室に陽歌を運び、寝かせたばかりなのだが、フェリシアーノの兄・ロヴィーノが俺たち（アントーニヨも含む）を医務室から追い出した。一体なんなんだろうか……………。

「ヴェ……………。兄ちゃん何であんなにカリカリしてるんだろ……………」

「親分の俺まで追い出されるっちゅーのは、ちょっと傷つくわあ……………」

……………」

寮の管理室に戻るため、廊下を歩きながら話していた。

「確かにどうしたんでしょうね、ロヴィーノくん」

菊も不思議がつている。

寮の管理室が見えてきた頃、管理室のカウンターに誰かが居た。男子生徒のようだ。

「んん？ 誰や？」

「よ、アントーニヨ」

「おお、フランススやないか！ どないしたん？」

その男子生徒が誰か分かると、ニコニコしながらアントーニヨは駆け寄っていった。

「いやー、多目的室を借りようと思ってな。それでその鍵を借りに」

「おー、鍵な。分かったちよつと待っててや」

そう言っただけでアントーニヨは鍵を探しにカウンターの奥の部屋に入ってしまった。

「そういやあ、お前たち。医務室に何をしに行ってたんだ？」

「え？ 別に、何も……」

日本がフランススの質問に答える。

「あ、そう言えばフェリシアーノ」

「なあに？ フランスス兄ちゃん」

「昼休み、生徒会室に誰かと一緒に来なかったか？」

「ヴェエ？ え、えーと……」

フェリシアーノはこちらのチラツと見て、陽歌の事を言うか言うまいか迷っているようだ。

「私です、フランススさん」

日本が言い出した。どうやら陽歌の事は隠すようだ。

「あ、マジで。何だ。そうだったのか」

「何かありました？」

「いや、何も。質問に答えてくれてありがとな」

フランススがニカツと笑って言うと、いつの間にかカウンターに肘ついて暇そうにしているアントーニヨから鍵を受け取り、俺たちが来た別の方向に歩いて行った。

「昼休み、何かあったん？」

「今は無理だが、機会があれば教える」

「そうか。あ、お前ら部屋戻るか？」

「はい、私はそうさせていただきます」

「お、分かった。ほい、鍵」

「ありがとうございます。では、ルートさん、フェリシアーノくん。お先に失礼しますね」

「ああ」

「また明日ね」

菊は俺たちに挨拶をして生徒寮棟に続く階段を上がっていった。

「お前らも部屋に戻るか？」

「俺も戻るよ。ルートは？」

「俺は……」

「陽歌ちゃんの事は別に気にせんでも大丈夫や。ロヴィーノがついとる」

「……そうだな。では俺も戻ることしよう。アントーニヨ、鍵を」

「ほいよー。……ほいつ、鍵」

「ありがとうー。じゃあね、アントーニヨ兄ちゃん」

フェリシアーノがアントーニヨにニコニコとしながら手を振り、菊と同じく生徒寮棟に続く階段を上がっていった。俺もフェリシアーノの後について上がっていった。

「またなー」

「……ギルベルトー、お前影薄いなあ。俺、ついさっき気づいたわあ（笑）」

「どうせ俺はッ……」

作者にも、弟にも存在を忘れられている不憫であった。

第十三話 「この組合せはとても萌えるよね!」 b y陽歌（前書き）

はい、こんばんはー（笑）

今すっごく眠たい中、小説を更新しようとしているネコです。

さて、毎回の恒例ですよ！

あてんしょん

- ・陽歌は医務室で目を覚まします。
- ・子分が親分の後ろに隠れる。
- ・一部にプーちゃん登場。

です。

やばいな、めっちゃ眠。

ではではびんごぞ

第十三話 「この組合せはとても萌えるよね!!」 b y陽歌

前回、親分子分を見て失神してしまった陽歌は今医務室にいた。

「ん……？」

白い天井……白いカーテンに視界の端に見えるくるんとしたやつは一体何だろう……？

「ここは……」

起き上がって辺りを見回した。

病院かな？ それとも天国？ そこまで重症じゃないなwww鼻血の時がよつぽど酷いwww

「気づいたか」

と視界の端に見える、くるんが揺れ、喋った。

誰だ？ とか思っただけで声がした方をみるとそこには……我が天使がッ！

「……天国？」

「は？」

天使がきよとんとしている。きよとんって言うより、「はあ？ 何言ってるのオマエ」的な顔されてるけどねっ！ でもさ……。

「だってだってロマーノいるし、天国やん！ マジ天国やんけ!!」

そう！ ロマーノやねん！ マジかわええ（*´、´）マジ俺の

天使!!! ちなみに、嫁は親分アンダーニョと島国！

「……いい加減目を覚ませ」

「じゅっ!？」

と言っただけで結構強烈なチョップをかましてきた。これがムキムキだったら、ボク死んでらあ＼（＾q＾）ノ

「つてか目の前に星が凄く見える。」

「い、意外と酷い……」

ボクはチョップされた頭をさすりながらロマーノを見た。

透き通った綺麗な肌、強気な焦げ茶色の瞳、綺麗に整えられた眉毛、通った鼻筋それから……フェリちゃんと反対側にあるアホ毛……！！

「……何じろじろ見てんだよ……」

「ふえ！？」

し、しまった！ 思わずロマーノの顔に見入ってしまった。んにしてもロマーノ……何照れてんねん！ 可愛すぎだろーがコノヤローー！！

「と、ところでお前は誰だ？」

「え？ ボク？ ボクはー、ロシアだよ」

頑張つて高戸さんの真似してみた！

「違うだろーがコノヤロー」

一発でバレた。しかもコノヤローが生で聞いた！

「で、名前は？」

と、改めて訊かれたので、

「ボクは志井菜陽歌。不法侵入した者です」

とボクは丁寧に言つてやった。

「！？ そ、そうか……。俺はロヴィーノ・ヴァルガス。腐れ弟の兄だ」

ロヴィーノが驚いた様子で自己紹介した。多分驚いたのはこの学園のセキュリティの事だろうなwww

「そっか。そういうえば、ボク何でここにいるのさ？ つてかここは

？ あとみんなは？」

「質問多い……。ちよつと待ってる。アントーニョ呼ぶから」

「あ、うん」

そう言つてロヴィーノは席を立つと、何処かに行つてしまった。

……あ、そういうえばギルの存在忘れてた。

一方ギルベルト。

「へつつくしよん！ あゝ……風邪か？」

「馬鹿は風邪引かへん（笑）」

「酷！ 俺様天才だから風邪引くし！」

「いや、天才だからってそれもないやろWWW」

まだ親分と話していた。

暫くすると、ロヴィーノと親分がやって来た。

その時ボクは何か髪がボサボサだったような気がしたんで、髪を結び直そうと髪をといた時だった。

「!？」

「おー、陽歌ちゃん。イメチェンするんか？」

ロヴィーノは何故か驚き、顔を赤くし、親分は、ニコニコは笑っていた。

グッドダイミングすギルよね（笑）

「違うよ、アントーニヨさん」

「親分でええで。あと敬語も使わんでええよ」

と、親分は微笑みながらボクに言う。

「え、本当？」

「おう！」

「やっつったー！ー！」

これで、これでツ……………念願の『親分』って呼べるー！ー！！
「お、おまっ」

「? 何? ロヴィーノ」

喜びに浸っているとロヴィーノがこちらを見て何か言うので、ボクはニコツと笑いかけた。すると、ロヴィーノは顔をより赤くして親分の後ろに隠れてしまった。

何ソレ可愛い……。写真撮りたいけど今ないんだよね、デジカメ。デジカメ、バッグに入れときゃ良かった……。

「何や、どしたん? ロヴィーノ」

「べ、べべ別に何でもねーぞコノヤロー」

「そうか。あ、陽歌ちゃん」

「何?」

「髪、結んだろうか?」

「ほんと本当!? ありがとう!」

「よし、じゃあちよつと座り直して」

「うん」

わーい 親分が結んでくれるなんて……!

数分後

ボクは鏡を見て愕然とした。

「……………」

「どうや? かわええやろっ」

何故……。

「? 陽歌ちゃん?」

何故…………ツ。

「おーい陽歌ちゃん?」

何故ツインテールなんだあああああ!!!

ボクには理解し難いよ! 何でツインテなのさ!? みんなしてヲタクなの!?

「陽歌ちゃん？」

「はっ」

ボクは親分の呼び掛けにようやく気づき、頭をこっち側に引き戻した。

「そついえばさつき倒れとつたけど、今は大丈夫か？」

「あ、うん。大丈夫」

とりあえずボクはツインテのまま親分と会話することにした。ちなみにロヴィーノは親分がボクの髪を弄り始めた辺りから（何故か）拗ねて、少し離れた椅子に不貞腐れた顔をして座っていた。かわいいなあ（*、*）

「そついえばさ、今何時？」

「今か？ 今は午後7時13分や」

「細かつ」とか思ったのは秘密

「やつぱここに泊まるしか、ないのかあ……」

「どないしたん？」

「いや……さ。親分、言ってもいい？」

「ええで。何をや？」

「実はボク、こことは別の場所から来たんだ」

「え……ホンマ？」

親分はちよつとは驚くものの、目をキラキラさせながら言った。

「うん。マジ」

それに対し、ボクはにっこり笑って言う。

「おい、どういう事が説明しろコノヤロー！」

「めんどくさいなあ……」

とか言いつつ、親分と子分にここに来た理由をルート達に話したように（だけど出来るだけ短めに）教え、寮ここに来るまでの話もした。親分、陽歌ちゃんの兄ちゃん知つとるで。陽輝やるー」

「え？」

ロヴィーノとボクはニコニコ笑いながら言った親分を見た。

「最後に逢あたの俺やし」

「え、も、もしかしてお兄ちゃん……ここに来たことがあるの!？」
「せや。どんくらい前やったかなあ。確か………一月おとひくらい前やっ
たかなあ」

「え!？」

おかしいよ! おかしくない!？ つい最近じゃないか!

「あん時はちっちゃかったなあ………」

親分は感傷に浸っている。ち、ちっちゃかったって……。今大学
生デスヨ!？ あんな奴が『ちっちゃかった』ってどういう事!？
「親分、それどういう事さ!？」

「え？」

「だから、『ちっちゃかった』ってどういう意味!？」

「え？ そりゃ、小四よんぐらいの男の子やったで？」

「!???!??」

もう、壊れてもいい？

第十四話 思うように進まない。それが会議だ！（前書き）

お久しぶりです。ネコです。

新年明けちゃいましたね。2012年でっせ。

……さて、毎回恒例の注意事項！。

あてんしょん

- ・今回は陽歌と再び眉毛さん視点です。
- ・何故か眉毛さん視点が長い。
- ・ggdgdしてます。
- ・感想いただけると、作者が飛んで喜びます。

みたいな（笑）

ではござー

第十四話 思うように進まない。それが会議だ！

前回、陽歌は医務室で目を覚まし、わけあって親分にツインテサ
れて、親分が兄・陽輝を知っているという衝撃的な事実を知ってし
まった。しかしそれはあまりにも時間軸の合わなさすぎる事だった。

「待つて！ 待つてよ親分！ お兄ちゃんは今、大学生なんだよ！
？」

「へ？ 大学……生？」

「そう！ だつてよく考えてみてよ！ 小四のお兄ちゃんが一月前
に来たんなら、そんな時ボクは七歳なんだよ？ おかしいでしょ？
ボク今17歳なんだよ！？」

「ほ、ホンマや……。確かに、今思えばそうや……。おっかしいなあ
……。 どういう事や？」

それはこつちが訊きたいデス。

「でも最後にお兄ちゃんに逢ったのは親分でしょ？ お兄ちゃんが
帰るとこ見たんじゃないの？」

「それは分からん」

キツパリ言われた……。

「けどな、陽歌ちゃん。一応言つとくけど、ここ（W学園）に一度
でも来たら、帰られへんねんで？」

「……………へ？」

親分がニコツと笑つて言った。

親分が親分らしくないし、なんとんでも目が笑つてない……。

こ、怖え……。 ロツ様並だな……。

ん？ ちよつと待てボク。親分は、『一度でも来たら、帰られな
い』って言ったよね？ え？ つまりさ、

「お兄ちゃんは、何らかの方法を使って帰った……て事だよね……」
うー……考えれば考えるほど分かんなくなる……。

「けど、陽輝には最初、帰る方法が分からなかった」

「え？」

ロヴィーノがボクを見て言う。

「だが、ここで暮らしていく内にだんだんと帰る方法が分かってき
た」

な、なんだそりゃ！？

「ええか？ 陽歌ちゃん。寮長つちゅーもんは、入って来た人、出
ていった人を覚えておかんにゃアカンのや。それは理事長かて同じ
事や」

「えと、つまり……？」

「つまり、親分とロヴィーノは仮であれど寮長や。理事長かて覚え
とる。せやけど、そうやない生徒はここから出ていった人の事を忘
れるか、臆気にしか覚えてないのどつちかなんや。それに、その人
が自分にとって特別な存在であつてもただの影の薄いクラスメイト
ぐらいの存在にしかなりえん。せやけど、この学園で一人、例外が
居んねん」

「え？ もしかしてそれって……」

ボクは今朝あつた事を思い出してみた。

『志井菜、か。懐かしいな』

『何言つてんの？』

『お前、家族に陽輝つてヤツいないか？』

『…………え?』

「アーサー…………?」

「そうや。…………陽歌ちゃん、カーランドに逢^おうたんけ?」

「うん、今朝。ボクがここに来たときに。あと、『前に……………だっ
たんだからな』って言った。つまり、前までお兄ちゃんはここの
生徒だったっていうことだよね…………?」

「せや、そういう事や」

親分は柔らかい笑みを浮かべた。

何コレ、ちよつ、マジ照れるつつつ!

「あ、陽歌ちゃん。もう8時なるし、お腹空いたやろ? 食堂に行
こか。今やったらちよつとみんな居る頃や」

と親分はニカツと笑って言った。切り替えの早さがパねえ…………。

ところ変わって多目的室 (アーサー視点)

「おーい、鍵を借りてきたぞ」

フランススが鍵をくるくる回しながら、のんきに歩いてきた。

「遅いぞ、髭」

「だまれ眉毛」

「あんだと!?!」

「やめるある。あへん、フランスス。おとなげねえあるよ。そもそもは、あへんがいけねえある」

ちっ……。確かに王クワンの言う通りだな……。

「そういえばアルフレッド遅くないか？」

俺は人数が足りないのを見て言った。

「確かにそうだよな。フランススくんが鍵を取りに行つてすぐに『トイレに行つてくるんだぞ！』って言つてトイレに向かつたつきり戻つて来ないよね」

イヴァンがニコニコしながら言う。

「まあ、とりあえず入ろう。どうせ直ぐ戻つて来るだろうし」

とほぼ投げやりなフランスス。

そして多目的室に入ったと同時にフランススが、

「アーサー、訊いてほしい事、聞き出してきたぜ」

と俺に言ってきた。

「そうか！ 逢えたんだな。それで、何て？」

「菊が『私です』だと」

そうか……。

「“アイツ”の事は隠すつもりなのか……」

「あとそれから、あいつらが医務室から帰つてきたところに出会でくわした」

「医務室？（お前は）行ったのか？」

「行けるわけねーだろ。逆に怪しまれちまう。ま、医務室に誰か居るのは確かだな」

「そうか……なるほどな」

「あへん、さつきから何フランススと話しては一人でぶつぶつ言つてるあるか？ 変な物とフランススを交えて会話してるあるか？」

王が「何してんだコイツ」みたいな目で見て言ってきた。

「ちげえよ。その事を話すから、取り敢えず席に座ってくれ」

俺は一息入れて、全員（アルフレッドを除く）が椅子に座つたのを確認した。

“アイツ”の事を話そうと思い、喋ろうとした。すると、
「いやー、ごめんごめん。すっかり長くなっちゃってさー。……ん
？ 何だい君たち。何で俺を睨むんだい？」
アルフレッドが戻ってきた。

「このAKY！」

「えーけーわい？ 何だい、それ」

「アーサーくん、アルフレッドくんは何言っても無駄なの、一番分
かってるでしょ？」

とイヴアンに言われた。まあ……確かにそうだが……。

「もうそんな事どーでもいーある。さつさと“アイツ”の事を話す
よろし」

と王。

「言われなくったって話すつもりだ」

「何の話をするんだっけ？ 今話題のメガマツの事かい？」

「お前は黙ってる！ メタボ！ ファーストフードばっか喰ってる
から太るんだろ！」

「五月蠅いなあ！ ヒーローだからって心がいつも広いわけじゃな
いんだぞー！」

アルフレッドがそう言っただけで俺に飛びかかってきた。

一方、陽歌達は。

「ねえ親分、この部屋うるさいよ」

「聞いたらアカン。アカンでえ陽歌ちゃん、ロヴィ」

「俺は何にも言っただけでねえぞ、コノヤロー！」

親分はそう言ってロヴィーノと陽歌の耳を塞ぎ、大阪のオカンみ
たくなっていた。

「とにかく二人ともやめるよろしッ!」

ガアンツ

王の中華鍋によつて俺とアルフレッドとのケンカは鎮められた。

「ケンカしても分らない事は一向に何一つ分からんままある。さつさと説明するよろし、あへん」

「……分かつたよ……」

もつと優しく止める方法はないのか……。まあ、王の言っている事は正しいから何も言えないが。気を取り直して、“アイツ”の事について話す事にした。

「いいか、“アイツ”というのは、今日生徒会室に現れ、f「ほんの一瞬だけだよ」……分かつてるから口を挟むなイヴアン。フェリシアーノにラリアットした？人間？の事だ」

「はあ!？ ？人間?!？ どうやってここに入った!？」

フランシスが驚くのも無理はない。本来、この学園は？国？のための施設で、？人間？が入るなんざ、到底あり得ないのだ。

「珍しいあるな。この学園に？人間？あるか……。こんな事は初めてある」

「!……」

平然とした顔で言う王に、俺は「それは違う」と言いたかった。

だが、寮に戻る前、理事長に呼ばれ、そしてこう言われた。

『忘れさせたモノを掘り起こすのはやめておけ。みんな、お前を信

じなくなる』

と。理事長に呼ばれ、そう言われた時、何も言えなかった。確かに、理事長の言う通りだ。今まででもそんな事はあった。その時、何一つ誰にも信じてもらえなかった。

だから、今回は「それは違う」と言わない事にしたのだ。

「……………どうした、アーサー」

「え？」

「あれだけアルフレッドが騒いでいたのに気づかなかったのか？」

「そ、そうなのか？ すまん……………。……………考え事をしていた」

「本当にどうしたんだ？」と心配そうに言うフランスス。ちょっと鳥肌立った。

「今俺に対して失礼な事思わなかった？」

「え……………。いや、別に」

何故かバレそうになった。あ、あぶねえ……………。

「それであへん。これからどうするあるか？」

「は？ これからどうするって、何が？」

「これだから若い奴らは……………」と王が頭を抱えて言った。

「？人間？に対する対応ある。それと、お前はまだ何か隠してるある。さっさと言うある」

「べ、別に隠してなんか……………」

そつだ。あいつらに言っただけでなかった。今朝“アイツ”に逢ったことを。

「さあ、さっさと言うある。あへん」

何だかいつもの王の雰囲気が変わったような感じがした。

「俺は……………に逢った」

「？ よく聞こえなかったある。もう一度言うある」

「……………俺は、“アイツ”に逢った」

「いつ？」

「今朝だ」

「……それはまた驚きだね」

とイヴァンが呟いた。

「どんなヤツなんだ？ そいつって」

いつの間にか着席しているフランススが訊いてきた。

「率直に言えば、女だ」

「え！ 女の子！？ どんな子なの？ 可愛い！？」

「女の子の話になると食いつきようが半端ないんだぞ」

とこれまたいつの間にか着席していたアルフレッドが呆れた口調でフランススに言った。

人の事言えんのかよ……。ハンバーガーの話になるとすげえ食いつくくせに……。

「特徴を言えば、イヴァンが生徒会室で言ったように髪の毛の長いヤツなんだが、そいつはポニーテールしていて、そのポニーテ（以下略）にアホ毛がある。そして何より分かりやすい特徴は……」

フランススの目が爛々（らんらん）としている。気持ち悪い……。

「女なのに、男子の制服を着ている事だ」

「……は？」

フランススがきょとんとしている。いや、フランススだけじゃない。王もアルフレッドもきょとんとしている。唯一していないイヴァンはニコニコ笑っていた。

「女子が男子の制服って……どういう事ある？」

「俺が知るか」

「ハンバーガー食べる時にスカートが汚れるのが嫌だったからじゃないかな」

「お前じゃないんだから、それはないない」

フランススはアルフレッドにそう言った。

「まあ、何はともあれもう8時なっちゃってるし、そろそろご飯食べに行かない？」

イヴァンが俺の真上にある掛け時計を指差して言った。

「ホントだな。そろそろ行かないと。それに、アーサーが今朝逢った子に逢えるかもしれないし、早く食堂に行こうぜ」
フランシスがウインクして言った。どうせ、口説くために行くんだらうけど。

(まあ、必ずしも居るとは限らないが……)
帰っていたら、それはそれで安心するんだがな……。

その願いは虚しく、見事に裏切られている事をアーサーは知らない。
い。

第十四話 思うように進まない。それが会議だ！（後書き）

トークコーナー

王「…で、あへん」

朝「あん？」

王「フランスに何を訊きに行かせたあるか？」

朝「え？そんなん分かるだろ？」

王「分からないから訊いてるある」

朝「（めんどくせ……。）いいか？俺はフェリシアーノに、『昼休み、生徒会室に誰かと一緒に来なかつたか』訊いてこいつてフランスに言っただけだ。前々回を読んでいれば分かる事だ」

王「フランスがよくあへんの言うこと聞いたあるな……。ってか
我^{わたし}たち、そんな小説読む暇なんかねえある」

朝「……（言ー言……）」

朝「そろそろティータイムにするかな……」

王「なんか話ズラされたある！」

……気にしないでください。喋らせたかっただけなんです……
(;)

次回もいつも通り遅くなると思います)・・・(・・・+

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4958t/>

W学園は、楽しいところっ！

2012年1月3日00時53分発行